

またダヒス博士の子息の云ふ處によれば、博士が或日女皇に英國の帝王表を列記せしめた、その時女皇には伯父ウイリアム四世王まで書き列ねました、博士は、それを見て

この次に帝位に即くべき人の名を御書きなさいと申し上げますと、女皇は嬌羞ながら

自身の名を書くは變だから

と仰せられましたと云つてありますが、コックス氏の物語といひ、ダヒス氏の物語といひ、何につけ彼につけ女皇が常に御身分の尊きことを御忘れなく、如何にも既に女皇になられ給ひしかの如く御思召されて居らせらるゝ事はよく了解ります。

(未完)



文苑

東京秋影生



四十

人の噂も七十五日とやら、兎角人間は忘れ易いもので有る、容赦なく過去を葬て行くタイムの進につれて、新しい問題が湧いて來ると反比例に、過去の記憶はその彩色が褪めて塵けになつて仕舞ふが、此處に年々新なる記憶となつて寧ろ其明瞭の度を増して繰りかへされ、恐らく我には終生忘れることの出来ないのは、わが亡き母君の事である。

母君の亡くなられたは、わが十三の時、其時

は只もう夢の様な心地、母君は遠い國に旅立たれたとてやがてはお歸りなさるであらう、この幼い我を置いてげばりにしてあの慈愛深い母君がどこへ往て仕舞ふものかと信じて居た。我はまだ死といふとの解釋を知らなかつたのである、がそれは空だのみで有た、翌年の宇蘭盆會に、今日は母君の歸るぞよといはれた父上のお言葉に我は如何に喜んだらう、茄子や胡瓜の馬を巧にこしらへて逸早くお迎へに往た時はいかに勇んで有たらう、がそれは現し身の此世の人でなく、御魂のみで有ると知て、いかに失望したのであらう、消氣かへつて寺の門を出る時の姿がどんなにいちらかつたらう。あゝ母君は永く歸らるゝとはないのであるか、あの慈愛深い母君は何故幼い我を置いてげばりにして遠い處へ往かれたのであらうと考へた

が、此時われは死といふものゝ慘酷などを始めて知たのである、死は人の生命を奪ふものである、死の手にとらへられては再び此世に歸て來られぬといふを悟つたので有た、あゝわが母君は死なれたので有るか。

爾來十年、我は遂に暖かき家庭に入るとが出来ぬ様になつた、母なき家庭のどんなに淋しいか、蜻蛉つりに日を暮らして歸る薄闇の門の戸に倚て待て居る人はない、丁年を超えた今日なほ母様とお膝にすがつて甘へてみたいとてそれも叶はぬ、女々しいと人は笑ふであらうが、野を分けずぐる秋風さらさらど、黍畑を揺かし柿紅葉を振うて小雀を追ひゆく彼方、あかど西に入る日を眺めて立てば、凭るべく温き懷を持たぬ我は、淋しさの餘り涙落さずには居られぬ、況して江湖流寓

の身となりて、壁一重隣りも吳越の情ある都人の間に處し、人のなさは塗り白粉の、只うはばかりの世の様をみては、如何してわが慈愛ふかい母君を想ひ起さずに居られやうぞ、されど噫、わが母君はかへらぬ人となられたのだ。

われは母君に就て多くを語ることを好まぬ、十三までの腕白ざかり、母君の御心勞も思はずに我は我儘に送たのである、今からかもへば勿体ない程で、わが落魄の父上を資けて四方に流寓し、傍ら我を鞠育された母君の御心勞は如何ばかりで有たらう、我は數々木枯吹きすさびて燈火牙ゆる冬の夜すがら、賃仕事の針を動かして居られた母君を見たことがある、若からぬとも女は之が身だしなみの髪なども自分で結はれる、髮結の手をかゝるとは滅多にない、あゝ我は知らなんだ、我が日々

の小遣錢がいかにして母君の財布の中に盡きぬか、お祭の揃の浴衣や提灯が如何にして作らるゝかを、況して櫃中の米と姐上の肉とが幾何の價を要するかに就ては一向無頓着で有たのだ、峭直人に屈せぬ父上（父上は至つて頭の大きい方で出来る帽子は被れぬ程であるそこで「大頭小さい帽子被りかね」と洒落られたともあつた、今に我の狷介狂峭人に容れられぬ性質を憂ひて、遺傳どはいへ處世の路を誤る基、うで乃父の轍をふむ勿れと戒めらるゝとも度々である）が、世に容れられず世に背き、一家を擧げて故山に歸耕するとなつてからは、母君は邸内に桑畑の有るのを幸ひ、養蠶を始め、殆んど夜の目も寝ずにその世話をなされた、其時も我は桑をされとの盼附に背いて逃げ隠れ、氣儘の遊びに耽たとも有た母君の御丹精

で美しく出来上つた繭を、やがては絲にしてそなたの祝衣になどお喜びで有たが噫何事も夢、誰かその繭が金にかへられて御身を葬る費用にならうとはおもひかけやうぞ、實に母君は年來の心勞にいたく健康を害したのが、此時一時に發し、ふと床に就かれたのが重つて、四十三歳を一期に遂にかへらぬ人となられたのである、慈愛深きその面影を一葉の寫真にとりて。

噫なつかしき母君よ、今一度わが頭を撫でて下さうなつたと云つて欲しい、母君眠いと膝に甘へてみたい、子供らしいと笑はるゝであらうか、われは子供にかへりたいのである、母君の此世に居られた子供の時に歸りたいのである、なまじ年を重ねて細さに嘗むる世の人の、辛き情をうらみわびては袖に涙の、かゝる時母君の在さばと、千

年みるとも物いはぬ寫真を抱いて夕日沈む野邊にイむだとも幾度か。綿々として千秋つきやらぬ別恨は風朝雨夜、紀念の寫真にそゝる涙年毎に増りてあゝ今になほ兒女の愁にかへりて慟哭を禁ずるをえなさぬ。柀の露の一雫、硯にうけてかきつくるはかなしぐさも、せめては心やりのすさびて有る。

細川忠興夫人

東京 森岡 たけ子

身を守るごと、雪中を犯して清香を放つ梅花のごとく、霜雪を凌ぎて其の色を改めざる松柏のごとくにして、節操堅固なる大丈夫も及ぶべからず。我國貞女烈婦も數多ある中に、わけて、芳名高きは誰ぞや、細川忠興の夫人こそ、眞に其人なれ。